

「新臨床 X 線診断学」第 2 版

自治医科大学教授	大 澤	忠	編集
自治医科大学教授	大 澤	忠	執筆
埼玉医科大学教授	平 敷	淳 子	
自治医科大学助教授	古 瀬	信	
聖路加国際病院放射線科医長	土 井	修	
弘前大学教授	竹 川	鉦 一	
東邦大学教授	平 松	慶 博	

長崎大学教授・放射線医学

林 邦 昭

本書の編者である大澤忠氏は若くして米国へ留学され、オールラウンドの X 線診断学を学ばれた方であり、オーソドックスな考え方をされる放射線科医の代表である。最近の各種の新しい画像診断法の開発・発展にもかかわらず、X 線診断学が最も基本にあるべきだとの考え方から、この本のタイトルは新臨床 X 線診断学とされている。編者以外の 5 人の執筆者もすべて海外留学の経験者のようである。

わが国の放射線診断学のレベルは最近とみに向上し、幾つかの分野では世界をリードするほどである。し

かし放射線診断学の全般的なレベルは、まだ米国にはるかに及ばないと思っている。それは、研究を中心としたこれまでのわが国の医学部放射線医学教室の在り方と無関係ではないようである。研究をおろそかにしてはならないことは言うまでもないが、臨床に直結した放射線診断学の全般的なレベルアップが必要である。換言すれば、われわれは、まだまだ general radiology を重要視するべきであろうと思うのである。

general radiology ということを考えるとき、本書は現在わが国にある放射線医学の教科書の中では最も

優れたものであると言ってよい。本格的な放射線診断学の本である。本書に書かれていること、掲載されている症例を理解できていれば、日常の臨床に大方間に合うと思われる。医学生から卒後研修医にレベルを合わせた第 2 版の序に書かれているとおり、実地の臨床に役に立つことがコンパクトに纏められている。放射線専門医試験の合格者は、この程度のレベルにはありたい、あって欲しいと思う。写真の画質も良い。

教科書としてほとんど完璧であるとし上げてよいと思っている。もっとも私は、新入医局員になるべく英文の、例えば Paul & Jahl 「Essentials of Roentgen Interpretation」や Felson 「Chest Roentgenology」などを読むよう勧めていることは、医局員の手前、断っておきたい。なお、仔細に読んでいくと記述の不足や、あまり適当でない症例を提示されているのに気付くが、これはすべての教科書について言えることであり、多くの場合、執筆者自身が一番よく心得ているものである。

B5 判 790 頁 1990 年 定価
10,094 円(税込) 送料 400 円

医学書院 刊